

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

事態連鎖から見たインドネシア語における ter-構文の働き
—受動から外れる「結果状態」を表す ter-構文—

氏 名

Rizki Andini

論 文 内 容 の 要 旨

研究の目的

インドネシア人日本語学習者には、di-構文を機械的に日本語の受身「(ら)れる」に置き換えることができるが、ter-構文、ke- -an 構文はそうではない（本論文では ter-構文を中心に行なっている）。機械的に日本語の受身に置き換えられない場合、ter-構文を「ている」、「である」「てしまう」「た」「(ら)れる」に訳している。なぜ、ter-構文がこのように広く使われているのだろうか。インドネシアの国語文法でも、ter-構文を受動として粗雑に扱っている。そこで、本研究では、ter-構文の働きを明確にしたい。

各章の内容

第1章 インドネシア語のしくみ

この章では、「態」またはヴォイスの範囲で、di-接頭辞と meN-接頭辞が親密に関わっている。この di-接頭辞がさらに本論文のテーマである ter-接頭辞の ter-構文と関連している。

第2章 ヴォイスの観点から見た日本語との対照におけるインドネシア語の受動表現

この章では、ヴォイスというのは、何に視点をおいて表現するかという文の機能意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系であるといえる。ヴォイスの観点から見た日本語とインドネシア語の受動の形式が実現する意味は受身に限られていない。

第3章 従来の受動

この章では「昇格」と「降格」という概念は、普遍的な受動化の影響である。直接の目的語の昇格（元の主語の降格も含める）は、目的語の前景化、受動態の一種として認められた。目的語が前景化されたため、構文内の他の要素よりも優位な位置に立つと考えられる。受動構文で最も考え得る条件の一つは、主語（ここでは被動作主、動作・作用を受ける対象）が動作主よりも *thematic* であるとする。

これは *ter*-構文・*di*-構文にも対応している。

第4章 *ter*-構文と「はたらきかけ」・「結果」の相関

この章では、*ter*-構文は *di*-構文と交替できる場合もあるし、交替できない場合もある。直接的に *di*-構文と交替できない場合、使役マーカの *-kan* 接尾辞と結合された *di*-構文 (*di-kan* 構文) と交替する。交替できるものは、意味構造に「主語そのものは動作や行為を受ける」ということであり、さらにその動作・行為は「働きかけ」として考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。この意味構造まで、つまり「(動作の) 働きかけ」は、*di*-構文で負担させる。また、それによってなされた「(変化) の結果」が持続している場合、*ter*-構文に表される。つまり、「結果の継続」は *di*-構文と *ter*-構文の相違点として考えられる。したがって、*di*-構文は「変化の受動文 = *Passive of Change*」である一方、*ter*-構文は「継続的受動文 = *Passive of State*」として表せる。「変化の受動文」がまず起きて、そこから結果が生じ、さらに持続している場合、「継続的受動文」は派生する。

第5章 「結果状態」から見た *ter*-構文

この章では、構文が表している行為・変化・結果状態の連鎖から見るならば、*di*-構文と *ter*-構文の意味構造は「主語が何らかの行為を受ける」ということであり、さらにその行為は「働きかけ」として考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。しかし、動作主の出現の面では、*ter*-構文ではこの動作主の存在が希薄になり、「結果状態」が際立っている。そのため、「受動文」より「結果構文」に近いということを論じた。最後に、*di*-構文は「出来事」を表す一方、*ter*-構文は「*di*-構文の「出来事」を出来事の結果としてもたらされた「状態」に切り換える *resultative* 構文といえるだろう。そこで、小野尚之 (2004) の「目的語結果構文」、Nedjalkov (1988) の“*Objective Resultative*”の用語を基にして、*ter*-構文と結果構文を組み合わせ、インドネシア語では「被動作主前景の結果構文」といえるだろう。

第6章 事態連鎖における結果の ter-構文

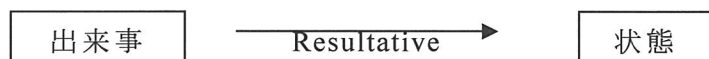
この章では、「結果的な状態」の「している」は、発話時において、あるいは過去や未来のなかの、ある瞬間において存在しつづかなければならない。

「変化動詞の完成相」のスルは「変化の完成」「結果の達成」、したがって「結果的な状態の実現」を表している。それに対して、継続相の「している」は「実現した結果的な状態の継続」を表している。

そして、状態形の使用に関する制約は、動作動詞は、「継続相」の「している」をとる形によって、「動作の継続」を表している。それに対して、「継続相」の「している」をとる変化動詞は、「変化の結果の継続」を表している。「対象に変化をもたらす動作」の動作動詞は、受身の形で変化の結果を表すことができる。

結論

di-構文を上位事象として考え、「出来事」を表す。一方、ter-構文は 下位事象として、「di-構文の「出来事」を（出来事の）の結果としてもたらされた「状態」に切り換える Resultative を表す構文といえるだろう。



ter-構文全体の意味では「完了」の意味がベースになり、「脱使役化」で過去の動作が希薄になり、状態そのものが表面に現れる。そうすると、ter-構文が表す意味は「受動の過程から得られた完了状態」と定式化できる。

つまり、本論文ではで結果構文として扱う ter-構文は、受動文にさかのぼる。ter-構文は「完了」から始まる。この「完了」は di-構文から引き継いだものである。動詞よりも形容詞的な動詞として傾向がある (adjectival verb)。

また、di-構文との違いは、「2 時間の間」「朝から」などの時間の長さに組み合わさると di-構文は「動作の長さ」を表現する一方、ter-構文は「状態の長さ」を表現する。最後に、resultative は perfect に関連していて、Maslov (1983) を基にして、resultative を「状態のパーフェクト」とよんで、パーフェクトの一種としてみなしている。